

# 多頭飼育に想うこと

田 中 文 哉

寄るとさわると、集団産地、多頭飼育、猫も杓子もこの2つの言葉を口にする。言葉には流行がある。風邪にもはやり風のあるようなものだ。ファッションといってしまえばそれまでだが、この2つの言葉はそう簡単に捨て去るわけにもいくまい。いささか理屈となるが、一体多頭とはどういう意味なのであろうか。頭数の多いことが多頭であるとすれば10頭も50頭も100頭もいづれも多頭と理解される。それも10より50、50より100と頭数の多い程多頭ということになる。ところで一体家畜を飼うのに多頭飼育が絶対的に有利なのかどうか、木質について考えてみたい。

× × ×

最近大量生産、マス・プロダクションということが問題となっている。集団産地を作って生産を高めようということで、結果的には多量の生産物を計画的に生産するための手段であるから、多頭飼育の言葉を意味するものと同義語に解してもよさそうだ。要するに多くを同時に計画的に生産しようとするための1つの手段とみてよいであろう。

従って多頭飼育の意味するものは、多くの頭数を飼えばその生産物が多量となるので集団産地ができたと同じように同時に多量を同時に生産することができるから有利となるであろうというような意味でいわれているのであろう。

× × ×

工業生産の状態をみると、大企業と中小企業に分類することができる。その生産性についてみると大企業は常に中小企業に優先しているとみられている。もしもそのことが哲理なら、大規模生産方式のみが繁栄して、中小規模生産方式は日ならずして消されていくであろう。がしかし現実はずしもそうと断ずるわけにもいかない。

商業についてみても、天満屋さん方式が有利でもうけが多く、他の中小商店方式は駄目だと言いつけるわけにもいくまい。こうみえてくると問題は生産の規模の大小の問題が本質ではなく、それぞれの規模に

最適の生産性の高い生産方法の有無の問題であるということに気付く。

× × ×

小女の方が子供を多く生むか、大女の方が子供を多く生むかについて子供のとき言い争ったことがあった。見た目にはがっちりした大きな女性が、いかにも多くの子供を生みはしないかと推察されるが、貧乏者の子沢山という言葉もあるように、大女必ずしも大量生産ではなく、むしろ小女が生産率の高い場合を応々にして見ることがある。

× × ×

多頭飼育をみれば生産性がいかにも高くなるだろうという直線的な考え方から、多頭飼育方式が提唱されるのではいささか心淋しい。集団産地さえできれば、これで最高の生産性が上ると早合点してはいけない。

× × ×

多頭飼育というのは植物に対する生産方式ではなく、家畜についての表現である。従って酪農や、養豚や、養鶏などの飼育について多頭方式の有利性から提唱されているものと理解したい。

しかし考えてみると、豚も鶏も、4～5の程度を飼っているものはなく、数十頭、数百千羽の飼育が通例となっている。いまさら何故に多頭飼育といわなければならないのであろうか、との疑問もある。

酪農について多頭飼育というのだと規定してしまえば、なる程と納得できそうだ。

豚や鶏は大集団を形成する飼育方式、つまり多頭羽飼育の方が普通となっているのに、なぜに和牛や乳牛がそうならないのだろうかという問題が提起される。

× × ×

蒙古や中共、ソビエトにおける牛の飼育は、舎飼い方式のものは必ずしも多頭とは言えないが、放牧方式のものはいづれも多頭方式である。何百千頭という羊の群や牛の群が、広い広い原野を移動している姿は正に悠大そのものである。ここでも牛が多頭

## 岡山畜産便り 1963.11

放牧されている。

こうみてくると、牛の多頭飼育という言葉は、案外日本の専売特許かもしれない。

× × ×

集団生活を好むものと好まないものがある。稲や麦は、1本ずつ作ることよりもある集合体を単位とする集団栽培がよい結果をもたらす。1株1株が1反2反を構成する栽培方法が普通となっているのは、この稲、麦の性質に一番適応しているからに他ならないのだと理解される。

菊なども小菊は集団栽培型となるが、大菊は1本、1本が単位となる。やっぱりその方が菊の大輪栽培に適しているからであろう。

ところで、豚も鶏も羊も結構集団型を好むし、牛にしても集団が適していると思えるにもかかわらず、もしも酪農の多頭飼育のみが問題となるのなら、一体その本質はどこにあるのであろうか。